**降誕節第２主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年1月7日**

**「起きよ」**

**イザヤ書60章1節**

**60:1 起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。**

**使徒言行録9章32節～43節**

**9:32 ペトロは方々を巡り歩き、リダに住んでいる聖なる者たちのところへも下って行った。**

**9:33 そしてそこで、中風で八年前から床についていたアイネアという人に会った。**

**9:34 ペトロが、「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい。自分で床を整えなさい」と言うと、アイネアはすぐ起き上がった。**

**9:35 リダとシャロンに住む人は皆アイネアを見て、主に立ち帰った。**

**9:36 ヤッファにタビタ――訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」――と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。**

**9:37 ところが、そのころ病気になって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。**

**9:38 リダはヤッファに近かったので、弟子たちはペトロがリダにいると聞いて、二人の人を送り、「急いでわたしたちのところへ来てください」と頼んだ。**

**9:39 ペトロはそこをたって、その二人と一緒に出かけた。人々はペトロが到着すると、階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。**

**9:40 ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。**

**9:41 ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。**

**9:42 このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。**

**9:43 ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンという人の家に滞在した。**

**1月1日、元日の夕方、おそらく日本中が一番くつろいでいるであろう日とその時間帯に能登半島地震が発生しました。その被害の甚大さの全容は今もまだわかっていません。新年早々の大地震に私たちは心を痛めると共に、被災された方々のことを覚えて主の助けを祈るばかりであります。**

**町のあちこちで燃え上がる炎、倒壊した建物がいくつもある映像を見て、私は今から29年前に発生した阪神・淡路大震災を思い出さずにはいられませんでした。当時20代前半の私にとってあれほどの大きな地震を経験したのは生まれて初めてだったからです。私は三重県名張市の実家に住んでいて、地震発生直前の午前5時40分頃に不思議に目が覚めました。たしかいつも6時30分に目覚まし時計をセットしていましたので、その時間に目が覚めることはめったにないのですが、その日は不思議と目が覚めたのです。数分後、突然下から「ドーン」と突き上げられるようにして家が揺れました。それでも名張は震度4だったと思います。慌ててテレビをつけたらどうやら大阪や神戸の方で大きな地震があったようだけれども、暗くてまだまだ被害はわかりませんでした。明るくなって再びテレビをつけたとき、神戸の街の様子を見て言葉を失いました。**

**日々祈りつつ被災地のために何かできることがないかと考えていたところ、震災から一月近く経って、名張教会でボランティアの募集の案内がありました。私は申し込み、兵庫県芦屋市にある芦屋岩園教会で寝泊まりをして一週間ほどですがボランティアに参加をしました。**

**ボランティアの詳細を話すのは控えておきますが、芦屋で見た倒壊した家があちこちにある街の景色、ボランティアでの経験は一生忘れないであろうし、忘れてはいけないことだと思います。神様に仕え人に仕える歩みの大切さを教えていただき、その経験が30年近く経った今でも生きているのではないかなと思います。後の人生の道しるべになったと思います。今にして考えれば、地震の起きる数分前に目が覚めたというのは、知らない間に神様から「起きよ」と呼びかけられていたのかなあと思います。**

**私たちはクリスマスまで読み進めていた使徒言行録に戻り、引き続き共に読み進めていきたいと思います。教会の迫害者から伝道者へと180度その歩みを変えたサウロの最初の伝道は上手くいかず、命を狙われて故郷のタルソスに帰らざるを得なくなりました。**

**それでも31節には**

**「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。」**

**とありますように、イエス・キリストを信じる者たちの数が増え、その群れが各地に生まれたのです。今日の聖書箇所に出てくる、リダもヤッファもその一つです。使徒ペトロはそのような信徒の群れを巡り歩き、そこでの様子を尋ねたのです。そのリダとヤッファで起こった二つの奇跡物語を通して神様は私たちに語りかけて下さっているのです。**

**リダで8年前から中風で床に就いているアイネアにペトロは語りました。「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい。自分で床を整えなさい」（34節）するとアイネアは起き上がりました。その様子を見たリダの人々だけでなく、シャロンの人々、シャロンとは地名ではなく、ヤッファからカルメル山に広がる平原のことのようです。そのあたりに住むたくさんの人々がアイネアを見て、主に立ち帰った、つまりイエス様を救い主と信じるようになった、キリスト者となったということです。**

**そして、ヤッファのキリスト者の群れにペトロは呼ばれて行きました。ヤッファのキリスト者たちは明らかにアイネアの奇跡を耳にしたからです。ペトロがヤッファに呼ばれた理由は、タビタという善い行いや多くの施しをしてその愛の業によってやもめの貧しい女性たちを支えた、彼女たちを愛した女性のキリストの弟子、そのタビタが病気のために死を迎えたからです。タビタがどれだけ多くの愛の業を行い皆から愛されていたのかは、その亡骸を囲みやもめの女性たちが泣きながらタビタが生前自分たちのために作ってくれた数々の下着や上着をペトロに見せたことからわかります。自分たちにはどうにもならない愛するタビタの死の前に、涙ながらに「何とかしてほしい」「ペトロさんなら奇跡を起こせるはずだ」と必死に訴える女性たちの姿にペトロは心が動かされたに違いありません。**

**それはかつてイエス様がヤイロの娘の死に向き合った姿、ナインという町のやもめの息子の死に向き合った姿、そのどちらもイエス様は死から甦らせるという奇跡を起こされました。その奇跡に立ち会ったペトロは、イエス様のことを思いひざまずいて必死に祈るのです。「主よ、かつてあなたがなさったように」という祈りだと思います。そして「タビタ、起きなさい」と言うとタビタは目を開きペトロを見て起き上がります。死から甦ったのです。ペトロは女性たちに甦ったタビタを見せました。彼女たちがどんなに喜びの涙を流したのか、連日の悲しい報道に触れている私たちによくわかる気がします。タビタが生き返った、その喜びの知らせはヤッファ中に広まり、多くの人が主を信じてキリスト者になったのです。**

**「起きなさい」「起きよ」これが、病の床にいたアイネアにペトロが語った言葉です。死の眠りについていたタビタにペトロが語った言葉です。アイネアとタビタ、二人が置かれている状況は異なりますが、全く同じ言葉をペトロは語ります。「起きなさい」「起きよ」それは原語でも同じです。その言葉はもちろん就寝中の人に「朝だから早く起きなさい。遅刻するよ」という意味での「目を覚ましなさい」の「起きよ」ではありません。アイネアに対しては「起き上がりなさい」「立ち上がって歩きなさい」の意味の「起きよ」です。タビタに対しては「死の眠りから目を覚ましなさい」「生き返りなさい」の意味の「起きよ」です。**

**このように状況も違えば意味も違う「起きよ」の言葉なのですが、その両方の「起きよ」に共通しているのはペトロの「起きよ」の言葉にアイネアもタビタも「起きた」ということです。アイネアはすぐに起き上がりました。8年間中風で寝たきりのアイネアがペトロの「起きよ」の呼びかけにすぐに起き上がったのです。そしてここで大事なのが34節でペトロが「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい」と言われて、アイネアがすぐに起き上がったことです。ペトロ一人の呼びかけではなくて、イエス様が癒して下さる、つまりイエス様がペトロを通してアイネアに呼びかけて下さったのです。それでアイネアはすぐに起き上がったのです。そしてその起き上がったアイネアの姿を見聞きして多くの人がイエス様を信じたのです。イエス様がアイネアに「起きよ」と呼びかけて癒されてアイネアはすぐに起き上がって、そのことが多くの人への伝道になったのです。イエス様はアイネアに「起きよ」と呼び掛けて下さって、呼びかけに応えたアイネアは自分の姿が豊かに伝道に用いられて、多くの人が信仰に導かれたのです。**

**死の眠りについていたタビタもまたペトロの「起きよ」の呼びかけに起きました。「起きよ」と呼びかける前にペトロはひざまずいてイエス様に祈ります。ひざまずき必死でイエス様に祈るのです。その上で呼びかける「タビタ、起きなさい」はアイネアの時と同じでイエス様の呼びかけです。「タビタ、起きなさい」タビタは死の眠りから目を覚まして、生き返ったのです。死の眠りから起きたことで多くの人がイエス様を信じる者になりました。イエス様はタビタにも「起きよ」と呼び掛けて下さって、呼びかけに応えたタビタも自分の姿が豊かに伝道に用いられて、多くの人が信仰に導かれたのです。**

**今日の旧約聖書の箇所はイザヤ書60章1節です。「起きよ、光を放て。」大変印象深い語りかけです。「光を放つ」その光はキリストの光を放つのです。「起きよ、キリストの光を放て」アイネアもタビタも「起きよ」この呼びかけに応えて起きました。立ち上がり、生き返りました。それはこの世においてキリストの光を放ったのです。イエス様に「起きよ、光を放て」と呼びかけられて、その呼びかけに応えて、起きてキリストの光を放ったのです。呼びかけに応えて、起き上がることでまた生き返ることでイエス・キリストの光を放ち、イエス様の愛の業を多くの人に証しをしたのです。その結果多くの人が信仰に導かれたのです。**

**イエス様は「起きよ、光を放て」と私たちにも呼び掛けて下さっています。「アイネア、起きよ、光を放て」「タビタ、起きよ、光を放て」と名前を呼んで呼びかけて下さったように、私たち一人一人の名前を呼んで、「〇〇、起きよ、光を放て」と呼び掛けて下さっているのです。この暗い世にあって、中々希望が見いだせないこの世の中にあって、キリストの希望の光をまた愛の光を放つように、イエス様は私たちに語りかけて下さっています。私たちはイエス様の私たち一人一人の名前を呼んで下さるこの呼びかけに応えて起き上がるのです。**

**病や死や悩みや苦しみや悲しみや災害など、私たちもまたその中で希望を見失い絶望のどん底に突き落とされて、自分の力では起き上がることができない状況に置かれます。「私はイエス様に見捨てられたに違いない」と思う時があります。しかし、私たちがどのような状況にあっても、イエス様は私たちに「起きよ、光を放て」と呼び掛けて下さっているのです。私たちがイエス様の呼びかけに応える時、イエス様は私たちの手を取り起き上がらせてくださるのです。その姿がアイネアやタビタのようにキリストの光を放ち、イエス様の愛を私たちの周りに証しをし、私たちが伝道に豊かに用いられるのです。**

**そして、教会はイエス様によって「起きよ、光を放て」と呼びかけられて、その呼びかけに応えて起き、あるいは手を取って起き上がらせてもらった者たちの集まりなのです。だからこそ、教会に集う私たちは暗いこの世にあってキリストの光を放っていくのです。イエス様の愛を周りに証しをするのです。愛の業を行っていくのです。それが伝道なのです。**